『賢愚經』 諸本の調卷と品題について

興 津 香 織

はじめに

漢訳『賢愚經』は高麗版（六二話）と元明版（六九話）の二つの系統がよく知られ、いずれも十三巻本であるが、日本に伝来した古写経は大半が十七巻本で、品題の並べ方も相違が多く、本書の成立を考察する上で必須の写本であろう。すでに諸本における調卷品次の異同の研究が福井利吉郎氏^①によりなされ、氏は東大寺本が十六巻本であると主張するが、福井氏の提示する東大寺本は、わずかな資料にもかかわらず平安・鎌倉古写経と一致する点が多い。よって本稿では平安・鎌倉古写経である七寺蔵本、金剛寺蔵本、西方寺蔵本の調査をもとに、十三巻本以外の中国における『賢愚經』と日本に伝来した『賢愚經』の系統について卷数を中心に考察したい。

1. 日本伝来『賢愚經』について

①東大寺本

東大寺本は「大聖武」とも称される奈良写経とされ、^②散存するものの多い中で最大の手がかりは東大寺蔵の卷十五である。福井氏は、卷十五のすべての品名を提示しており、平安・鎌倉古写経本の卷十五と品名、品次、品番号ともに一致する。それのみならず、論文中のその他の東大寺本の断簡においても、品名、品次、品番号の一致を見、諸本の校勘によつて、平安・鎌倉古写経本が東大寺本に最も近いことが判明した。東大寺本Ⅱ十七巻本を明確に示す資料は現在無く、十六巻、十七巻のどちらかは断定できないが、文字の異同においては東大寺本と平安・鎌倉古写経の系統は非常に近い。

②七寺本、金剛寺本、西方寺本

七寺本は平安末期（一二七五年頃）写で、卷十を欠き卷十七まで現存する。金剛寺本は鎌倉時代（一二六三年頃）写で、卷五と卷十一〜十七が現存する。西方寺本は鎌倉時代（一二八一年頃）写で、卷一、二、五、六、七、十、十二、十三が現存する。西方寺本は卷十三までしか現存せず、十七巻本と断定

はできないが、現存する巻における調卷・品次の一致や三つの写本の校勘により異読等がほぼ一致することから、これらは同じ系統と考えてよい。

③石山寺本、興聖寺本

ともに平安末期写の石山寺蔵本（一二六一年頃）と興聖寺蔵本（一二八四年頃）は実見していないが、調査報告書の^④法量調査の記録に各巻の始めの品名が見え、その調卷品次が判断できる。両者とも十七巻本であり、調卷・品次が七寺本・金剛寺本・西方寺本と一致することから石山寺本、興聖寺本も同じ系統であろう。

2. 正倉院文書における『賢愚経』の記述

『大日本古文書』^⑤に掲載された正倉院文書によつて、『賢愚経』に関する記述を見ると、天平三年の写経目録にはじめて『賢愚経』の記載があり、「二帙十七巻（先十巻後七巻）」となっている。^⑥次に、天平十四年五月の「経生等手実帳」には「二帙十七巻」とあるが、そこには第二帙第一巻（巻十二）を書写した記録が無い。同年八月十八日の「装潢本経充帳」によると「第一帙十巻第二帙六巻」とあり一見、十六巻本と判断できよう。しかし「第二帙六巻」の下に「已上一巻」、それに続く天平十五年六月二十六日に「第二帙一巻」とあり、巻第十一が欠けていたのではないか。また天平勝寶八年五月三十

『賢愚経』諸本の調卷と品題について（興津）

日の「奉写経所本経奉請并借充帳」には「先所奉請経下帙第一巻欠也」とある。神護景雲二年までの間に十六巻や十七巻という記述は多く見られるが、十三巻は一箇所である。以上のことから判明したのは、十六巻本、十七巻本、巻十一の欠けた十七巻本という三種の『賢愚経』である。巻第十一の欠けた十七巻本が十六巻本と認識される可能性は大いにあるだろう。奈良時代には十三巻本、十六巻本よりも十七巻本の『賢愚経』の方が主流である。

3. 中国における十六巻本『賢愚経』について

①経録等の確認

経録によると、十三巻本以外の記述は『歴代三宝紀』に見られる「十五巻」が最初であり、それより後の経録から「十六巻」「十七巻」が見える。これらの記述から「十六巻」「十七巻」の成立は『彦琮録』（六〇二年）以前になるといえる。また現存の漢文蔵経中の『賢愚経』の収録については、いずれの蔵経においても十三巻であり、十五、十六、十七巻の記述は見出されない。^⑦

②『一切経音義』の記述

『一切経音義』（以下『音義』^⑧）における『賢愚経』は、玄心・慧琳ともに一卷から十六巻の語の音義があり、『音義』の底本となった『賢愚経』は巻第十六までであると確定できる。玄心・

慧琳撰それぞれの『音義』は掲げる語が若干異なるが、同じ品次であるため以下区別しない（ただ卷十六では慧琳の方が『賢愚經』の品次に対応し、玄応は一箇所品次が異なるが、ともに卷十六として対応している）。『音義』底本は古写経本に卷九まで卷数と品次が一致し、卷十以降は古写経とも版本とも一致せず複雑な関係になっている。とはいえ三本との一致（三本は「降六師品」以降卷数が異なる）と比べ、古写経本と『音義』底本とは近い。『音義』には卷二と卷六がないため、卷数の確定できない品も存在するが、それらは古写経と三本の『賢愚經』の品次と対応させて推測した。『音義』の最後にある「堅誓師子品」を卷十六の最後とすると、それ以外に残るのは「汪水中虫品」と「沙彌均提品」のみとなり、この二品で一巻を形成するには短すぎる。よって『音義』底本は十六巻本とするのが妥当である。

③十三巻本以外の痕跡

十三巻本ではない『賢愚經』を使用した痕跡を『賢愚經』を引用する文献において探る。明らかに十三巻本ではない『賢愚經』を引用するのは、窺基『觀彌勒菩薩上生兜率天經贊』で「依賢愚經第十六卷云。生波羅奈國劫波利村輔相之家。」とあるのみだが、以下の話から「波婆離品」の引用とわかる。「波婆離品」が第十六にあるのは、今のところ『音義』底本として想定した十六巻本だけである（十七巻本の古写経本

は卷第十、三本・高麗本は卷十二）。同じ『觀彌勒菩薩上生兜率天經』^⑩の注釈である吉蔵『彌勒經遊意』^⑪と元暁『彌勒上生經宗要』^⑫では「十二卷」の「波婆離品」を引用する。これは十三巻本からの引用である。少し混乱が見られるのが、同様に注釈である懷輿『三彌勒經疏』^⑬である。二箇所「波婆離品」を引用するが、「如賢愚經第六十云。」と「賢愚經第六云。」とある。これは窺基の「第十六卷」の影響であろうか。

吉蔵『金剛般若疏』^⑭では「如賢愚第九卷云。」とあり、以下に『賢愚經』の文章に少し手を加えて「須達起精舍品」を引用する。これは高麗本では卷十にあるが、十七巻本、三本、十六巻本では卷九にあり、どの本か断定できないが、『音義』で『賢愚經』卷九にある「卓犖」という語が、諸本ではほぼ「卓略」であり、「卓犖」は『金剛般若疏』の引用だけである。以上、『賢愚經』を引用する際に、『音義』底本と同じ調卷の十六巻本を見ている文献が存在することから、『音義』底本は十六巻本『賢愚經』と考えられる。

4. 結論

奈良時代の東大寺本は、福井氏の想定する十六巻本ではないと断定することはできないが、十七巻本である平安・鎌倉古写経と文章の表記が非常に近いことから、十七巻本である可能性が高い。正倉院文書では十六巻、十七巻とともに卷十

一を欠いた十七巻本が存在し、奈良時代には十三巻本、十六巻本よりも十七巻本が主流であった。また『音義』底本の『賢愚経』を十六巻本と想定し、それと同じ調卷である十六巻本『賢愚経』を見て引用する文献が存在した。よって福井氏想定十六巻本と異なった十六巻本があるということになり、東大寺本は十七巻本に限りなく近いのである。

1 福井利吉郎「東大寺本賢愚経の研究」(『藝文』三巻11・12号、一九一二年)：『福井利吉郎美術史論集 上』(平成十年、中央公論美術出版)に再録。

2 東大寺本は奈良写経とされるが、巻十五の複製である『日本古写経集成』11「伝聖武天皇 賢愚経 大和切」(書藝文化新社、平成十二年)の解説(飯島春敏)によると中国から請求された説もある。

3 拙稿「日本伝来『賢愚経』の復元的研究」(『仙石山論集第三号』国際仏教学大学院大学、平成十八年九月刊行)を参照。

4 「石山寺の研究―一切経篇―」(石山寺文化財総合調査団編、法蔵館、昭和五十三年)と「興聖寺一切経調査報告書」(『京都府古文書調査報告書、第十三集』、京都府教育委員会編集、1986年)

5 『大日本古文书』における各出典は、木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(国書刊行会、平成元年)のp.89を参照。

6 奈良写経の『賢愚経』は十七巻本説がいくつも見られる。『東大寺辞典』(平岡定海著、昭和十五年、東京堂出版)では(p.123)「天平時代では二帙十七巻」とされ、『写経より見たる

『賢愚経』諸本の調卷と品題について(興津)

奈良朝仏教の研究」(石田茂作者、東洋文庫論叢第十一、昭和五年)ではこの天平三年の書写目録を根拠とする。

7 「二十五種蔵経目錄対照考釈」蔡運辰編著

8 慧琳撰『一切経音義』(大54、p.789-p.790)。玄応撰『一切経音義』(高麗蔵卷32)は『日本古寫經善本叢刊 第一輯』(国際仏教学大学院大学學術フロンティア実行委員会)も参照。玄応音義における『賢愚経』の語句については、上海師範大学の徐時儀博士のもとで耿銘氏が研究しており、氏の論文「玄應『賢愚経』音義校讀節記」を徐博士より頂いて参照することができた。

9 大38' p.275a.5-6' 窺基(六三二―六八二年)

10 大14' p.418' 455年

11 大38' p.263b.23' 吉蔵(五四九年―六二三年)

12 大38' p.300c.10' 元曉(六一七年―六六七年以後)

13 大38' p.305b.14' p.315a.13' 憬興(六八一年)

14 大33' p.93c.23-

付記：本稿は七寺、金剛寺、西方寺蔵『賢愚経』無しには成立し得ないものである。ご配慮賜りました七寺御住職蟹江良三師、金剛寺座主堀智範親下、西方寺御住職西岡信敬師ならびに三寺院の御当局様に甚深の感謝を申し上げます。

〈キーワード〉 賢愚経、平安鎌倉古写経、大聖武、一切経音義

(国際仏教学大学院大学)

example of a certainly precious object with historical value for Buddhist studies.

34. Ippen Shōnin's Marital Status: A Reexamination

OKAMOTO Sadao

It is said that Ippen Shōnin 一遍上人 quit the priesthood, and that he was married. It is alleged that his wife was Chōichi 超一, but is it true? This paper examines recent studies and finds historical support for their accounts.

35. On the Scroll Division and Chapter Titles of the Various Recensions of the *Sutra of the Wise and the Foolish* (賢愚經)

OKITSU Kaori

It is well-known that the text of the Chinese translation of the *Sutra of the Wise and the Foolish* (Taisho Canon, vol. 4, No. 202) survives in two lineages: (1) the Korean Canon version, which contains 62 stories; and (2) the Yuan-Ming Canons recension which has 69 stories. Both versions are divided into 13 scrolls 十三卷. On the other hand, the majority of the Japanese manuscripts copied during the Heian and Kamakura Periods amount to 17 scrolls. Furthermore, the Heian-Kamakura MSS lineage also shows differences in the order of the chapter titles. The dissimilarities in the scroll division and chapter order between various textual witnesses (Khitan Canon, Korean Canon, Song Canon, Yuan-Ming Canons, Tōdai-ji MS, Dunhuang MS) as well as in the citations from the *Jinglū yixiang* 經律異相 have been analysed by Rikichirō FUKUI 福井利吉郎. According to this Japanese scholar, the Tōdai-ji 東大寺 MS consists of 16 scrolls. The Tōdai-ji version presented by FUKUI consists of only small fragments, but these seem to show remarkable similarities with other old Japanese manuscripts of this sutra. In this paper, I examine three newly discovered textual witnesses: (1) the Kongō-ji 金剛寺 MS in 8 scrolls, dating from the Kamakura Period; (2) the Nanatsudera 七寺 MS in 16 scrolls, copied at the end of the Heian Period; and (3) the Saihō-ji 西方寺 MS in 8 scrolls, which goes back to the Kamakura Period. My analysis focuses on the differences in the number of scrolls in which the text was transmitted in

China and Japan.

36. Nichiren's *Chu-Hokekyō* and the Notes upon Which it was Based

SEKIDO Gyōkai

The *Chu-Hokekyō* is a work in 10 rolls in which Nichiren (1222-1282) added bibliographic reference data in the blank spaces of Lotus Sutra. Copies of the *Chu-Hokekyō* now known can be thought to have been made in the later years of Nichiren's life. Many examples of bibliographic notes in Nichiren's own hand are extant. Nichiren created the *Chu-Hokekyō* by putting his notes in order. However, earlier versions of the work in progress no longer exist. I therefore investigate the relation between the completed *Chu-Hokekyō* and the notes upon which it was based.

37. The Twenty-five Sacred Sites of Saint Hōnen in the Mikawa District

YAMAMOTO Hiroko

In Japan there are the twenty-five sacred sites where the twenty-five historical holy scenes of St. Hōnen's activities are imitated. From the end of the Edo period until the present, the twenty-five sacred sites were three times reconstructed in the Mikawa district. The areas where these sacred sites exist tend to expand with the passing of time. However, in districts where several of the sites exist next to each other, they tend to decrease. The expansion of the sacred sites at Mikawa, therefore, as compared with the nationwide situation, is a particular case.

38. How did Shōkū Define the Way to the Pure Land?

TU Yu-chan

Ōjō, which means to be born in the Pure Land after one's death in this world, is a serious issue that has been discussed for a long time. As one of the topics of Buddhist thought, Ōjō can be approached from various aspects. Ishii Kyōdō, a scholar who tends to discuss Ōjō in respect of its manner and value, suggests that Ōjō is not only a phenomenon of transition from a world to another, but should be most emphasized in its internal signification.